

ホトトギス

九月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特准掛紙承認第百六二七号
平成二十三年九月一日発行(第百十四巻第九号)



俳句随想 〔三百五十一〕

汀子

俳句の季題を集めて掲載している歳時記には、その時期に咲く花の名前を全て入れているわけではない。また、俳句に詠みがたい花もあり、季節がはっきりしていないのも載ってはいない。しかし、時期がはっきりしている花はそれを季題として詠むことは吝かではない。やがてその花の名句が例句として出来たならば歳時記に新季題として採録されることになる。日本列島原産で白いふさふさした香りのよい花の樹木はトネリコという。こんな香りがよく美しい花を一句に詠みたいと思っても歳時記に季題として載ってないので残念であると言われた。私は迷わず「それはどんどんお作り下さったらいいですよ」と申し上げた。やがて季題として定着する日があると思う。季題として収録するためには、その言葉に季節感があること。季節がはっきりしていること。例句があること。などが必要である。現在、気象庁などが二十四節季について相応しくないのである。季節の遅速ことを言っているの聞いた。中国から渡ってきたものであり、季節の遅速はその年々によって、合わないのも出て来るかもしれないが、その基本を動かして仕舞うと毎年違ってしまふのではなからうか。例えば立春が変わると四季がなくなってしまうのではなからうか。やたらに動かして欲しくないと思う。

平成二十二年九月一日 ロイヤル俳壇

いくたびも心に問うて夜長かな
花野とも見れば風情のある庭に
文庫に名とどめ育てて藤袴
又今日も残暑に耐ふる限界に
今日よりは松の手入に来る庭師
九月三日 朝日俳壇四選者四十周年出句

俳壇の露の歴史を語らばや
爽やかに仕事はかどる祝ぎ心
山四の露踏み分けて来し懐古
九月四日 芦屋ホトギス会
颯風の雨さへ待たれをりしこと
九月五日 下前句会

くれなゐの水引草の孤高かな
道に治ふ山水退し盆の月
盆の月八尾は小さき町なりし
九月五日 清交社
ふり返る心は遠し十六夜へり
蜻蛉の空も遅れてをりにけり
十六夜の月は雲間でありしかな

岳麓の撫子摘みし日の回顧
庭手入済めば蜻蛉戻り来し
九月十日 工業倶楽部
手入れし虫の所在を問ひし庭
露深き大地に暁けの星残る
快晴の明かしの露を踏み旅

九月十一日 日本伝統俳句協会全国俳句大会前夜
皆 秋の 汗 尊しと 迎へし 日
九月十二日 日本伝統俳句協会全国俳句大会
快晴やたちまち乾く草の露
九月十四日 大阪倶楽部

月育ちはじめて五日より数ふ
七日月星に君臨はじめけり
秋の蚊の待ちぬし木陰通りけり
秋の潮の音の届かぬ島泊り
秋の潮俯瞰する窓開けて泊つ

ともかくも夜長の時間使はねば
九月十四日 綿業倶楽部

そこまで力を雨に開きし秋日傘
露けしや力を抜きて風を聞く夜
時間との戦ひここに露けき夜
九月十五日 夏潮句会
山路行く霧に尾灯を逃さじと
晴れてゆく霧を信じる他はなく

大会を語る灯下の親しさよ
いつまでも咲き継ぐ合歓の花の果
九月十七日 句会と講演の会
恒例の子規忌の墓参欠かさず
鈴虫の四角に鳴かせをりし籠
沢に活け秋草らしく落着きぬ

九月二十日 祝「玄海」二百号
玄海の冬波を越えゆく力
九月二十日 お月見五人会
日数はや明日は待宵月仰ぐ
活け方は芒にまかせをりにけり

あやささんを待らしてより芒艶
桂子さんにもどこか似て吾亦紅
りんだうは律義な韻子さんら
夜の帳降りてやうやく月見客
あさつての名月待てぬ者同志
新涼の夜風の高き纏ひけり

活けられた尾花よそほひはじめけり
九月二十一日 有恒倶楽部
待宵の雲と存問はじまりぬ
家中のどこに置いても月の供華
人も又まどうてをりぬ穴惑
コスモスや風の方角見えて来し

風道のあるともいへぬ秋桜
みちのくに踏み込みしより罽雲
九月二十一日 無名会
寄せつけぬ星となりたる月仰ぐ

育ちゆく月待宵となりにけり
食欲の秋には自制なかりけり
大地の空に從ふ星の秋の蝶
大地の秋に從ふ星の秋の蝶
目の前を過りたるより秋の蝶
月孤高供華は饒舌なりしかな

九月二十一日 俳句α依頼句十句
短日や暮れてはかどる稿債も
短日の誰が言ひ出せしことなるや
枯尾花活けてはじまる会なりし
仕残せし師走の予定崩れゆく

短日の内緒話はずつぬけに
冬ざれの庭に水音新しく
意識してをりし冬至でありしこと
落葉して鏗脱ぎたる啄木かな
冬の鳥狭庭に何を啄むや
日脚伸ぶ日々々に期待を置くことも

九月二十四日 時雨句会
晴れてゆく霧閉ざしゆく霧の中
山荘の霧なつかしく恐ろしく
忌日過ぎ今年は今聞かぬ鉦叩
今宵はや立待月と呼ばれたら
どこをどう入り来し居間の鉦叩

霧抜けてゆく着陸の態勢に
よく見れば動かぬ霧のなかりけり
九月二十五日 摩耶山俳句大会
快晴といふ爽やかな道しるべ
芒にも惚ふ心を置く山路
吸ひ込まれさうな静けさ露葎

九月三十日 きらぎ会
三日月に従ふ星のあることを
月の供華ほほけて二十三夜かな
秋草といふよりほかのなきことも
三日月に心を置いて旅の夜々
その名問ふことより親し秋の草

道の辺の名もなき秋の草とのみ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年九月一日 夢二忌全国俳句大会

羽音来て新涼の風搔き回す

九月二日 蕉心会

くらくらと二百十日の下町に
台風に助けてもらひたき日和
鉦叩都心に時の止まる頃
どやのどの辺り風立つ秋扇
秋団扇 秋扇 秋日傘行く
欲しがりませんこの残暑勝つまでは

九月三日 N H K 「坂の上の雲」関連番組収録

木下闇人を優しく包み込み
丸ビルの歳月に鳴く時鳥

九月五日 野分会菅屋例会

衣被ころがるランチョンマットかな
虫の声夜を誘ふサラバンド
衣被つるりと故郷裏返す
虫籠に昔の音色ありにけり
屋の虫めく阪神の為体

九月八日 カトリック新聞選者吟

聖堂の扉は重し初月夜

九月九日 土筆会

蚯蚓鳴く俳句の未来語るかに
枝豆や会ひたくないと言つてみる
真葛原心も白くしてをりぬ
蚯蚓鳴く地底王国あるやうに
枝豆といふ丹波路の色香かな

九月十日 六甲会

丸ビルに一つ灯りて夜業かな
夜業てふ午前零時の静寂かな
衣被ころりと皿をはみ出して
恋語る時衣被少し邪魔
スカイツリー五百メートル夜業の灯
衣被君より白く剥かれたる
ロンの小屋跡七草の浄土かな
夜業終へシンデレラエクスプレスへと
歯形つけころり転がる衣被

九月十日 虚子記念文学館投句

九月十一、十二日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

初紅葉国生みといふ華やぎに
秋潮をもつともらしくしたる島
天井に星床に星灯下親し

九月十三日 朝日カルチャー若草句会

国生みの島花野なす一部分
秋出水ビル街といふ落し穴
やうやくに気温定まる良夜かな
大花野木道尽きてより本気
思はざる出会ひもありて良夜かな
紫に始まる花野への一步

九月十五日 「俳句研究」冬の号出句

朴落葉踏んでここより獣道
数へ日やソロコンサート終へし指
初景色てふ狭庭にもある気品
重箱の家紋の辺り淑気満つ
凍滝の一本盛り上がるところ

九月十六日 登高会

ビル街を包み込みたる良夜かな
獺祭忌今年幾人逝きたるや
獺祭忌愚陀仏庵のことをふと
故郷の良夜大都会の良夜
その中に忘れられたる穴まどひ

九月十八日 ホトギス社句会

鈴虫を伽とし芦屋マダムかな
獺祭忌この後五十年如何に

九月二十一日 草木瓜会

鐵路越え帰燕の空となりゆける
露の世を駆け巡りたる訃報かな
昨日とは違ふ顔して露の我
秋燕まだまだ未練あるらしく
朝露の風に触れゆくまでの黙

九月二十一日 目黒学園句会

竹の春雀のお宿この辺り
木道の歩は女郎花より軽し
竹の春貫いてゆく西の旅
鱒雲故郷繋ぐ鐵路かな
竹の春覆ひ尽してある山気

九月二十六日 野分会東京例会

追伸を書き終へてより虫時雨
衣被転がる先の白き指

九月二十八日 若水句会

秋灯下汝は他人と言ひし妻
秋灯下いつもの店のいつもの娘
鱒来て敷島の海甦る
秋灯下今年も美酒はお預けか

雑詠

廣太郎 選

木蓮の花の崩れに逢ふ夕べ たつの 浅井青陽子
 行列は取りやめの沙汰花の雨 同
 うつくしきもの咲き満ちて百千鳥 同
 魔法派と科学派のみて蜚気楼 神戸 藤井啓子
 今日出るぞ今日こそ出るぞ蜚気楼 同
 追ふほどに蜚気楼とは逃げてゆく 同
 メトロ九段下駅を出て花人に熱海 熱海 嶋田一步
 東京に父母の墓あり花人に 同
 癌細胞検査に安堵花人に 同
 余花にして初めて花に会ふ心地 東京 今井千鶴子
 仰ぎ見て今年の余花は一人に 同
 衣更へて心そのまま立ち出づる 同
 天意なほ吾に生きよと余寒あり 福山 竹下陶子
 花吹雪てふ黄金の刻を浴ぶ 同
 太陽も子らと遠足してをりぬ 同
 空に碧地にわかみどり五月来し 榎原 稲岡 長
 しやんしやんと松蟬いのち囃しけり 同
 朴咲けり葉のうてなより乗り出して 同

畑打つて土竜の国を乱しけり 東京 大久保白村
 桜餅にも 関東風 関西風 同
 純白の聖土曜日 シクラメン 同
 トルソーの隣に置かれヒヤシンス 袋井 湖東紀子
 纏ひたる夜の匂ひのヒヤシンス 同
 空の 青水の 青翡翠の 碧 同
 満開とはなざかりとはやや違ふ 神戸 後藤立夫
 石鱗玉とは丸さうに見ゆるもの 同
 矢車を回してをりぬ京の風 同
 つつましく咲きつゝありぬ花の山 芦屋 黒川悦子
 雨止めばそのまま眠る花の山 同
 み吉野の花の闇とは匂ふもの 同
 甘茶仏金の雫をこぼしけり 熊本 岩岡中正
 二三歩を歩みたまへり甘茶仏 同
 花の雨祈りのやうに降りにけり 同
 鯉幟風呑むときも風の中 香川 湯川 雅
 夏霞旅恋ふ視線潜らしぬ 同
 挟み込む光の層や若楓 同
 表紙絵の青き教科書風光る 神戸 山田佳乃
 喚声の球場裏に亀の鳴く 同
 惜春や爪先に置く花の色 同
 八重桜その身を軽く見せ散りぬ 東京 橋本くに彦
 にぎはひの薄れし園に夏近し 同
 子等の声集め薄暑の水飲み場 同

雑詠句評（八月号より）

昭代・一步・比奈夫

くに彦・雅・暮潮

純也・仁義・佳乃

しげ人・廣太郎

母が雛飾つてしまひたる不満 徳島 岩田公次

雛飾りは結構気配りのいる面倒な作業ではあるが、女子には真に楽しい一刻なのである。雛を求めた時の事、幼い頃の思い出話など母娘で語り合いながら、雛との再会愛着を重ねて来た。今年も当然その日を心待ちにしておられたのであろう。それが帰宅して見ると綺麗にお雛様が飾られている。その時の落胆振りが目に見えるようである。読者にもその心情が痛い程伝わって来る心憎い句と言えよう。（昭代）

毎年三月三日に飾られている「雛」であるが、子供にとつても毎年それを箱から出し、自分で飾る事も楽しみのひとつではある

が、その年は何故か母親が一人で飾ってしまい、子供はそれを知らずに、もう既に飾られているのを不満に思っているのである。仄々とした情景が見て取れる。（廣太郎）

花衣とはおほげさな普段着で たつの 浅井青陽子

花見にゆく時の衣服が所謂きちんとした服装でもなく、それかといつて常々家の中で着ている普段着のままというのでもなく、普段着よりはいくらか派手な少し目立つ服装にしたというのである。あの華麗な桜の花を見にゆくには普段の味気ないラフな服ではなく少しは目立つ服にしたいと思った。それをいくらか大袈裟にしたことを敢えて「おほげさな」と平仮名で詠んだ。花衣という季節に対して「おほげさな」という語が出て来たことが此の句の面白さである。（一步）

ファッションセンスが皆無の筆者にはあまり御酒落の事が判らないが、やはり「花衣」も、人によつては御酒落の最先端の服を着こなすのであろう。それでもやはりフォーマルとは少し違うものでもあり、その辺の微妙な姿がこの一句から見事に引き出されているのではないだろうか。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

花子選

巡り来てこの小城下の春惜む たつの 浅井青陽子
水亭の春を惜める歩みとも 同
若鮎に 広き 夙川 芦屋川 東京 稲畑廣太郎
如月を引き寄せてゐる空の色 同
春塵の被災地に立ち拭く泪 京都 安原 葉
被災地を癒す日永であれかしと 同
地震見舞とて故郷より桜鯛 東京 今井千鶴子
花の旅つつしむ気持ありながら 同
花に酔ふ心の灰と戻り来し 石川 辻口八重子
納骨は花の散る日ときめてより 同
句ごころといふ朧なるものいとし 神戸 長山あや
春陰の深さは水音の深さ 同
人生を続けてゆけと五月来る 大阪 薦 三郎
壊滅の近づく地球囀れる 同
夏霞明石 大橋 天に浮く 奈良 古賀しぐれ
音先へ先へと進み船遅日 同
み吉野や百の雫の花の雨 大阪 佐土井智津子
花惜み言葉惜まず吉野山 同

椽の花鳥食ひたる跡ならむ 樞原 稲岡 長
粽解くのも面倒な私の鬱 同
あるときは音たてて降る落花かな 熊本 岩岡中正
淋しさは句帖に落つる花の屑 同
百寿翁庭百年の春を愛づ 吹田 宮崎 正
百年の庭に真紅のチューリップ 同
地震の町一夜の明けて霞立つ 仙台 赤川 誓城
地震見舞ふ甘酒なども荷の中に 同
峰に落つ月ひときは花明り 東京 河野美奇
別るるを引きとめをりし残花かな 同
ひと家族ごとに青空汐干狩 高槻 会田仁子
汐干籠よりしたりし日の雫 同
家に満つるとはよき言葉春の風 神戸 後藤比奈夫
チューリップ聯隊などと詠みし頃 同
どこまでも伸びて竹皮脱がぬまま 同 三村純也
母の日と子等が言ふまで忘れぬし 同
その音は露の葉を打つ雨のもの 東京 橋本くに彦
名産の尺余の露の重さかな 同

天地有情句評

汀子

地震見舞とて故郷より桜鯛 東京 今井千鶴子

東京の作者にも届いた地震見舞。

花に酔ふ心の仄と戻り来し 石川 辻口八重子

ようやく花に心を寄せる思いが戻って来た悲しみ。

巡り来てこの小城下の春惜む たつの 浅井青陽子

矍鑠と日常を健康にあつた作者の為人。享年百三歳のご生涯を

句どころといふ臆なるものいとし 神戸 長山あや

春の季節感は如何にも臆がびつたりする。

全うされた。

如月を引き寄せてゐる空の色 東京 稲畑廣太郎

人生を続けてゆけと五月来る 大阪 薦 三郎

空の色に季節の移ろいを委ねる作者。

厳しい人生の体験に挫けそうな作者に快適な五月。

春塵の被災地に立ち拭く泪 京都 安原 葉

夏霞明石大橋天に浮く 奈良 古賀しづれ

東日本大震災の現地に立つての感慨。

明石海峡大橋の夏の情景。(以下略)